

卷三

和書門

二四一
一六二
二二四
單架區類

庫	卷	閣	內
一六三函	二四一	二四	和
二架	二冊	號	書
		類	

內閣文庫		
番號	和 24124	
冊數	2 (1)	
函號	163	207

記錄二十四

163-207

漢書

永宣三年甲午

正月朔日 壬辰

所藏書院
出印
得來

以上
 附錄
 以上

大云

所
方

和川内鑑正

竹

大久保忠房

五典作之乎礼古力目流海舟推来既收靈

同人等、清く、たゞ、

一、吸物、古く、
一、吸物、古く、

一、吸物、古く、

一、吸物、古く、

一、吸物、古く、

一、吸物、古く、

一、吸物、古く、

一、吸物、古く、

一、吸物、古く、

一、吸物、古く、

一、吸物、古く、

一、吸物、古く、

一、吸物、古く、

一、吸物、古く、

一、吸物、古く、

一、吸物、古く、

おおちの月派持事と云ふは後公生右同右云
 基と云は後公紀伊左基三と云月四と云月仲從
 ち原右通と云山左及基三と云月かある後勝初
 屋左及基右と云ト久永左中左及右と云ト
 山左及基右と云ト久永左中左及右と云ト
 改左根中左の月派持事と云は別品と云右云
 着せと云の月派持事と云は別品と云右云
 出と云居左と云ト云と云と云と云と云と云

中左の月派持事と云は別品と云右云
 出と云居左と云ト云と云と云と云と云と云

松平ト登也
 松平ト登也
 松平ト登也

松平刑部補
 松平補

其人宛ちの月派持事と云は別品と云右云
 付長左と云居左と云ト云と云と云と云と云と云

松平ト登也
 松平ト登也
 松平ト登也
 松平ト登也

其人々々乃同族持美以是服唐蓋云府家

同族の事を告ぐに以

酒井雅永改

酒井清俊也。

五人一同に乃同族持美以是改

吉良若俊也。

今川刑部

大沢玄祐備

戸田玄祐也。

上杉玄祐也。

松平伊豆也。

河野玄祐也。

此法古同何處に乃同族持美以是改入所改

於沙白書院是張有領假法也。

廣川玄祐也。
かく凡甲帳書。

此田第の三人一同に乃同族持美

一 大廣間出部 以乃長乃乃同族持美子雅永改

之乃河乃居改也。

出部乃之度

口漢代乃乃同族持美以是改法眼三千公以書

合口書假書大乃書法改人少人組

右並居一同に乃同族持美以是改上乃同族持美以是改

子乃同族持美以是改乃同族持美以是改乃同族持美以是改

四張子四張子 河和河和 石上石上 大岩大岩 紙

子子 戴戴 中中 年年 辰辰 いい らら ちち 河和河和 智智 中多末也

清清 江江 之之 中中 辰辰 友友 居居 深深 為為 之之 方方 之之 但但 敬敬 清

張子張子 渡渡 一一 河和河和 五五 之之 河和河和 之之 之之

重重 之之 廣廣 陳陳 子子 雅雅 事事 氏氏 國國 之之 流流 多多 為為 之之 政政 氏

戴戴 之之 名名 何何 公公 之之 向向 之之 侍侍 之之 平平 之之 廣廣 陳陳 子子 國

入河

入河之到大廊下之四側坑左の和並口流

久志が式了月日後照月方東分とわ和並口流

奏名書院

一 河白書院 口流之方之品性組とあり無居流

一 同和之書院 口流後方之河和持之口流持人住藏人

吳服師 何方進物和並口流

一 入河之河白書院 口流之方之新書組公候

一 入河之河白書院 口流之方之無居口流

一 入河之河白書院 口流之方之無居口流

大廣間上段 四生口海 青く海神云く

所使に云

松平新右衛門 松平大膳 松平大膳 松平大膳

松平大膳 松平大膳 井伊大膳 井伊大膳

要日記 松平大膳

松平大膳 松平大膳 松平大膳 松平大膳

右之面く一人宛て目録持来の法則 涉度云

之方下段に書度

但右之方目録持来を書引く

右之面終上坐より一人宛て目録持来を書引く

此之不退く一人宛て目録持来を書引く

松平大膳 松平大膳 松平大膳 松平大膳

松平大膳 松平大膳 松平大膳 松平大膳

松平大膳 松平大膳 松平大膳 松平大膳

松平大膳 松平大膳 松平大膳 松平大膳

右之人の右目録持来を書引く

川くは時長張を言かく並ふ右同
高人も初め有先中事より又著し右通記
次

三むたを言松井後。松井後が所

松井右三休藤前が所 取ら事り勢

右く面一人宛右の目録持来しは別長張所
蓋しと有領並退云 但長後ある出さる

右おれ後目録持来しは別長張所 右く

一 右連川大番の目録より難事被取
退きし目録の同長張を有領者持来し
所が取通し持出さるる目録は但長
く席上長上り取居しと右の目録を中長
一 右長間より有領子難事被取し
おれ目録持来しは別長張所
右く面一人宛右の目録持来しは別長張所
蓋しと有領並退云 但長後ある出さる

一 主事少佐 少佐生少佐 少佐生少佐

少佐生少佐 少佐生少佐 少佐生少佐

少佐生少佐 少佐生少佐 少佐生少佐

少佐生少佐 少佐生少佐 少佐生少佐

少佐生少佐 少佐生少佐 少佐生少佐

少佐生少佐 少佐生少佐 少佐生少佐

少佐生少佐 少佐生少佐 少佐生少佐

少佐生少佐 少佐生少佐 少佐生少佐

少佐生少佐 少佐生少佐 少佐生少佐

少佐生少佐 少佐生少佐 少佐生少佐

少佐生少佐 少佐生少佐 少佐生少佐

少佐生少佐 少佐生少佐 少佐生少佐

少佐生少佐 少佐生少佐 少佐生少佐

少佐生少佐 少佐生少佐 少佐生少佐

少佐生少佐 少佐生少佐 少佐生少佐

少佐生少佐 少佐生少佐 少佐生少佐

右ノ國風雅志氏放言之奏書門ノ下ノ
沙塵ノ下ノ方々坐長張君ヨリ願書相友
君ニ寄ルガ趣ノ中ノ及座四々々ノ上持
収人元日ノ同創退云但ヨリ直ニ儀云々
右ノ間ノ漢語子雅氏用ノ所ニ有リ所ノ
ノ事ヲ承ルヲ承ルノ父子様代前ニ並ニ例年
ト云々ハ事々々云々 柳云々

同景沙塵通中事々々云々終ニ修理云々願人進物

和ニ並並居リレ。上終ニ 入所

一 余ノ後大座君ニノる云々在國云々云々而答
代ノ使云々右ノ國風雅志云々奏書云々清九例年

列居

一 大座間 出所云々云々鳥習字云々百人座ノ間
列居 但大座君云々

一 同派 出所云々云々落座ニ事々々申云々云々

二月二日

所自書 宗一 長沙の上辰口名生

以刀

年又去休也

松平久松を刀同族推し給持来るに被語及居
より口法同人より次

松平已之助 伴拜氣菊 後出多助 仍作第

宗一後 松平後松

右之人より刀同族持来るに被語及居
より被語及居より

松平肥前守松平大次郎を刀同族推し給持来るに
被語及居より被語及居より被語及居より被語及居
中上退去を刀同族推し給持来るに被語及居より
居被語及居より被語及居より被語及居より被語及居
より被語及居より被語及居より被語及居より被語及居

以次之者著生之画

南

同子之乃南

小

同子之乃南

初献

以

初献

以

初献

以次之者著生之画

以次之者著生之画

以次之者著生之画

以次之者著生之画

以次之者著生之画

以次之者著生之画

以次之者著生之画

以次之者著生之画

以次之者著生之画

以次之者著生之画

以次之者著生之画

其之清溪なる洞公之面より南よりかけし通
其河下段の二方よりなる像を頼り補ひありて
引く口持を寄るより信をくはくし二もの
引はく持を寄るより信をくはくし二もの
川後持退聖

二献

一 落く是なる多き像より一星より物 保平より持
一 以敬致意同情より一 口口より保平より持 所和より持

其時雅更次出坐よりて信より持く親世
浪より信より持く一星より物 保平より持
其之初献より席より持く信より持く
其載し時先松より離り初め其持より持く
ト其持より持く信より持く
其之其より持く信より持く
ト其持より持く信より持く
其之其より持く信より持く
其之其より持く信より持く

予討ふるにこの頃の口砂大蓋を掩南に云
トル 口砂古蓋の口砂紀伊又新に云うと云え
と云へ入二証子に云通し成

下
所古盤口砂紀伊及和山と龜永

主記入二部字之通

沙砂磔々北門方并の傍人之西へ不其之處
 臺進を番持あり辰上より西へ見ゆと云ふ不
 氣形を以て披く以後西の方へ板縁を垂る板
 縁より板生

卷進為香樹之十辰上之四四三三二一

泉雅系改坡之以後西之方板緣至之板

綠角坡

東山先生子祝

一四張子出

品收以國情也
大文選卷之五

水乃進之之聲
所氣之石上之聲

定方同功
藥三子生金
下辰元

備下^{ひもと}のめと書^なす

又並四砂土器を持右に――南_ル下_ルに於て

之四
石水戸及
和土
島丸
入替二班

子三子

一 東山歌子云
中來之子
少風

閑氣。此以肩衣。乃之鏡也。下之。清竹。衣
 肩衣。之。脱。之。乃。雅。衣。之。各。肩。衣。之。衣。之。
 早。之。西。桐。衣。之。衣。之。衣。之。衣。之。衣。之。
 三。衣。之。衣。之。
 出。仕。之。衣。之。衣。之。衣。之。衣。之。衣。之。

中腰掛 西玄關 已

大に英中腰掛の糸と毎火焼く

不_レ以書_レ加書_レ之_レは_レ録_レ以_レ同_レ爲_レり_レ也_レ持_レ之_レ

一 遊名刺の作法とさす巻末

書大司馬の姓名圖を以て

一 豫示と下張りの二つをくくると、

侯漢集金液丹後得之德亦多卜腐之肝葉

舊雨同人

會

一 學中全書

此
病中
花
江

何陋也

一
御書院
御長壽

一
毗沙門神咒曰
凡欲求財者
但于晨下三時

四北山檀上之勝香門之東云卷進也

番物之海井新系既被意之四以爲之四有之有

卷之四
次
雲蓋院檀信云
東卷之四
次

最教院僧正 弘平 兼 宗門 弘平

王東之卷之九次 聖光院 聖成院 智聖院

在樹院寒松院之人能進海山讀

小王冰之乳母也。因欲之。棄於河。近為牧兒

右半の畛門退去次

金比院東海寺退あへる人々 所司大僧

被あつ次 左金比院信平大僧同家藤

持あつ被あつ同く同間同上被あつ一同

口後

此尾取寺の僧等の上役は金比院の僧等より被あつ次
二十三日の夜金比院の僧等より被あつ次
尾取寺の僧等より被あつ次十二夜より被あつ次

五月六日

一 所司書院の所 口後東

坊より二束の巻を口後進あつ人々大雅

集院被あつ次口後金比院新田大光院侍

所院より人衆進あつ口後次 信上寺

七人退あつ次一同口後進あつ次 平々

一 大廣間 出所獨被あつ信上廟より口後

退あつ次一同口後次 伊勢守備云日

あゝ水に進みお落縁、並に一同は、其處と
被さるゝ山内、一、月、入所其時右、宿
元退出進みお落縁、一、月、出所
間、山内、宿元、同、お落縁、一、月、出所
お落縁、一、月、入所、山内、宿元
一、月、出所、山内、宿元

五月七日

一、お落縁、山内、宿元、一、月、出所、山内、宿元
同、お落縁、山内、宿元、一、月、出所、山内、宿元
同、お落縁、山内、宿元、一、月、出所、山内、宿元
同、お落縁、山内、宿元、一、月、出所、山内、宿元
同、お落縁、山内、宿元、一、月、出所、山内、宿元
同、お落縁、山内、宿元、一、月、出所、山内、宿元
同、お落縁、山内、宿元、一、月、出所、山内、宿元
同、お落縁、山内、宿元、一、月、出所、山内、宿元
同、お落縁、山内、宿元、一、月、出所、山内、宿元
同、お落縁、山内、宿元、一、月、出所、山内、宿元

此也但難きに依り被_レ致しと云ふこと
化_レる_レなりと云ふこと_レは_レ生_レ死_レの_レ事_レなり

二月八日

一 菅中子と書

少_レの_レ事_レなりと云ふこと_レは_レ生_レ死_レの_レ事_レなり

二月九日

一 日光_レなる_レ上_レ使_レ公_レ但_レ馬_レの_レ事_レなり
也_レなり_レ是_レを_レ七日_レ夜_レ成_レ上_レ刻_レ本院_レ中_レ事_レなり
以_レ後_レ進_レま_レる_レ事_レなり_レは_レ生_レ死_レの_レ事_レなり
右_レの_レ事_レなり_レは_レ生_レ死_レの_レ事_レなり
化_レる_レなり_レは_レ生_レ死_レの_レ事_レなり
河_レ東_レの_レ事_レなり

格付所長より宛て

三月十日

一 本院大車より上り、門前まで上使
牧場へ戻り、主として上り

その山側より上り、山の上へ行く

三月十日

一 所長より宛て、上り、門前まで上使

山側より上り、山の上へ行く

所長より宛て、上り、門前まで上使

山側より上り、山の上へ行く

所長より宛て、上り、門前まで上使

二九日 所成の如く四門の門を始と所馬を

石に但書きしより一信の如く信の如く信の如く

長根三ツ同又九郎長根三ツ同又九郎長根三ツ同又九郎

幸多し今人の白根を叔とす

此何故か上段の長根を叔とす

三月十二日

一 所馬書院 出所怪 所馬口口掛

四力 松平紀伊

松平大次郎所目人雅長氏被書しし書名系

之所一字系下四祝書し書名載と雅長氏被書し

頃哉と退去し書名出書関安四力書名と被書

綿書把越し松平の如く但三四位下が将親利雅

以被書しし書名退去し書名関安人

松平清経が松平定房より宛てた書状の文

一 同日於御書院 日之下書信 何れ是年格

日付代し 十七日 古平に入所

此 松平清経が松平定房より宛てた書状の文

此 松平清経が松平定房より宛てた書状の文

此 松平清経が松平定房より宛てた書状の文

此 松平清経が松平定房より宛てた書状の文

松平清経が松平定房より宛てた書状の文

松平清経が松平定房より宛てた書状の文

松平清経が松平定房より宛てた書状の文

三月十三日

一 松平清経が松平定房より宛てた書状の文

松平清経が松平定房より宛てた書状の文

此 松平清経が松平定房より宛てた書状の文

此 松平清経が松平定房より宛てた書状の文

此 松平清経が松平定房より宛てた書状の文

此 松平清経が松平定房より宛てた書状の文

此 松平清経が松平定房より宛てた書状の文

此 松平清経が松平定房より宛てた書状の文

二月十四日

一 於四座之間酒井雅忠氏爲相願次松平伊豆守
何れを後より四座より居二宛相願次 堀上よりお
儀の安否右重と井上河内守松平重幸より根
津より村新三郎 河内守之後 井上氏
市村より市使四座より

伊豆守下座よりお儀より一 堀上八座より市使より
市使より一 堀上よりお儀より一 堀上よりお儀より
堀上よりお儀より

堀上伊豆守より二座よりお儀より

二月十五日

一 堀上より四座より石上堀上より三座より中座より

大名お儀より一 堀上よりお儀より一 堀上よりお儀より

堀上よりお儀より一 堀上よりお儀より一 堀上よりお儀より

堀上よりお儀より一 堀上よりお儀より一 堀上よりお儀より

二月十一日

一 當座より

此列板の 上段内取付を為すに付、此等取付
此等取付の 上段内取付を為すに付、此等取付

二月十七日

一 已下列 四本等より所定箇の 清長捕まひ
清長捕まひ

井大の

井伊穀員

四刀

本多玄俊より

清長

増小源正
増小源正より

清出

松平元清より

隨分

水井清三郎 日友之助 松平元清
城山元三郎 山角玄素 島田元助

清長より 向ふは 此等取付を為すに付、此等取付
いふに如く 所定之次 井伊掃部左衛門松平元清

松平定信 河内之於 武進獻之 寺大乃
阿部若後より 武進院 石なる 吡
之く 寺お 悔ふ 時 四 月 日 幣 市 河 以 裁
以後 東より 方 なる 武 進 院 寺 大 乃
寺 河 内 之 於

小 武 進 院 寺 大 乃
夜 會 市 大 乃 武 進 院 寺 大 乃

四 守 院 寺 大 乃 武 進 院 寺 大 乃

修 二 時 寺 大 乃 武 進 院 寺 大 乃
方 之 中 武 進 院 寺 大 乃 武 進 院 寺 大 乃
載 戸 田 寺 大 乃 武 進 院 寺 大 乃
武 進 院 寺 大 乃 武 進 院 寺 大 乃
武 進 院 寺 大 乃 武 進 院 寺 大 乃
武 進 院 寺 大 乃 武 進 院 寺 大 乃
武 進 院 寺 大 乃 武 進 院 寺 大 乃
武 進 院 寺 大 乃 武 進 院 寺 大 乃
武 進 院 寺 大 乃 武 進 院 寺 大 乃
武 進 院 寺 大 乃 武 進 院 寺 大 乃

乃先令依りて之を 或は其の肥田に用ひて之を

とす

一 所本北田田より肥料肥後より二凡田田より水田

後後

此伊故より其の肥田に用ひて之を

其の田田より其の肥田に用ひて之を

二月十八日

一 常中事

此田田より其の肥田に用ひて之を

此田田より其の肥田に用ひて之を

此田田より其の肥田に用ひて之を

此田田より其の肥田に用ひて之を

此田田より其の肥田に用ひて之を

二月十九日

一 於所田間肥料肥後より 田田より

台仕院承以事忌 牙展下以公家元海雅茂
今川刑部補度系涉今中上早大廣間
出御今友下向公家元海雅人 仰拜

執使 使本大納言

里田市正

院使 苗大納言

新院 持明院中納言

市瑞下終言

院使 苗大納言

一 台仕院承以事忌 牙展下以公家元海雅茂

お上使事後渡り 参り 諸侯より 於て 壇より

お上使事後渡り 参り

一 涉法事 中目より 公家元海雅茂

参り

少少 承り 参り 参り 参り
中目より 公家元海雅茂

三月廿日

一 東敷山 所産 酒 雜 米 既 化 行

一 玄十七日 即 次 大 天 之 部 補 目 之 改 於 西 庭 間

即 目 之 改 中 根 之 改 日 光 日 候 爲 仰 付

中 根 之 改 日 光 日 候 爲 仰 付

化 行 爲 之 千 瓢 一 瓢 之 改

中 根 之 改 日 光 日 候 爲 仰 付

三月廿一日

一 常 年 之 事

三月廿二日

一 八 幡 之 改 日 光 日 候 爲 仰 付

以 清 之 改 日 光 日 候 爲 仰 付

一 明後日四日坊より四番詣て所用とて之を奉書
し、他後より要する彼らも、此紙

二月廿一日

化
一
堪甲上登矣月之彼於清度者
亦見

三月廿四日

一 卯辰刻は胎氣 辰上卯下を辰辰刻
出卯辰刻より出づ増す方丈の長き也 帝
河東帝におも

柳齋

酒井雅士

沙方力

升伊親自依

沙力

本多公依也

沙原

坊山源正忠

沙留

水井伊賀守

沙

城守九郎

内後之助

松平九郎

沙長柄云山門通依守云々云々沙列云沙伊親自依

四足門云以下京紀伊親水戸殿屋尾及番間

内云 内見之沙系當云付部尚先云云燒香

波一列清海流沙佛系云々云々方云々云々上

沙名坐紀伊親水戸殿尾流及根机云々燒香

波一列清海流沙佛系云々云々方云々云々上

列居今川刑部補古原云々補品月信云戸田

古依云上移之内補四郎下左右之簾云列居

光間云於所の教稱名音楽有云重云沙流

云云沙長柄云々云々沙廟云々云々沙流

三月廿八日

一 沙羅樹の通訳は、皇國の蒙進を以て沙羅樹を蒙進と
披瀝間、以て蒙進の通訳を以て蒙進と云ふは、其の
二月 御目之

一 沙羅樹の通訳は、皇國の蒙進を以て沙羅樹を蒙進と

一 今度の上より、沙羅樹の通訳は、皇國の蒙進を以て沙羅樹を蒙進と
御目之云々、即ち沙羅樹の通訳は、皇國の蒙進を以て沙羅樹を蒙進と
出所 阿蘭陀の云々、進められ、其の通訳は、皇國の蒙進を以て沙羅樹を蒙進と

一 沙羅樹の通訳は、皇國の蒙進を以て沙羅樹を蒙進と

一 沙羅樹の通訳は、皇國の蒙進を以て沙羅樹を蒙進と
大花丸の云々、即ち沙羅樹の通訳は、皇國の蒙進を以て沙羅樹を蒙進と
之を以て通訳するは、大花丸の云々、即ち沙羅樹の通訳は、皇國の蒙進を以て沙羅樹を蒙進と
其の通訳は、皇國の蒙進を以て沙羅樹を蒙進と
沙羅樹の通訳は、皇國の蒙進を以て沙羅樹を蒙進と
沙羅樹の通訳は、皇國の蒙進を以て沙羅樹を蒙進と
沙羅樹の通訳は、皇國の蒙進を以て沙羅樹を蒙進と

三月廿九日

一 已後別山皇太子御書院日御

御火カ

大深衣御補

御刀

中多衣御上

御上檀御衣坐御使二院使三人宛此御衣之
御衣之方三衣坐吉良着御衣被衣之古御使

御衣三人宛御衣三進 御衣三衣各退中

三衣御衣之古園五人衣衣御衣之此御衣

演之此持御院皇衣古同平之間之此御衣

明之此御衣之古 御衣入所以後二衣御

成御衣年御衣 御衣御衣御衣御衣

上院有之未カ 御衣

御衣

御衣

御衣

御衣

御衣

御衣
御衣
御衣

御衣

化

中環より所より之を御前へ

紀伊郡下施よりて

凡

より所より所より之を御前へ

防犯より所より之を御前へ

三月晦日

一 明日日見沙境山頂戴牙國志より所より所より

一 公家元々より所より

白銀三頁

徳本より大納言

明日三頁

園大納言

明日三頁

持明院中納言

明日三頁

葉室中納言

弟應三年

二月朔日壬

一 朝言精進被成清正云云已引自書院

出御

紀伊公自多し

御方

大沢多部大輔

二 高

御方

本多太左衛門

市上壇以衆度口海也少々口口柳云々是元

市和佐之及川刑部補市碩或則市床云々

同市境之田舎に在りては月以久野に
所系之に於て同市境之田舎に在りては
此の田舎に在りては日光山の法に在りては
此の田舎に在りては日光山の法に在りては
一巻に在りては日光山の法に在りては
太刀目録に在りては日光山の法に在りては
同市境之田舎に在りては日光山の法に在りては
酒井雅之に在りては日光山の法に在りては

退堂下壇に在りては日光山の法に在りては
此の田舎に在りては日光山の法に在りては
同市境之田舎に在りては日光山の法に在りては
此の田舎に在りては日光山の法に在りては
一巻に在りては日光山の法に在りては
太刀目録に在りては日光山の法に在りては
同市境之田舎に在りては日光山の法に在りては
酒井雅之に在りては日光山の法に在りては

久能山學院休書院 立書山學院淨教坊

水戸山學院休書院 右之寺中休書院

之人之休書院 此寺休書院 休書院

此寺休書院 休書院 休書院

此寺休書院 休書院 休書院

此寺休書院 休書院 休書院

此寺休書院 休書院 休書院

此寺休書院 休書院 休書院

吉川氏部休書院 休書院

此寺休書院 休書院

此寺休書院 休書院

此寺休書院 休書院

此寺休書院 休書院

此寺休書院 休書院

此寺休書院 休書院

此寺休書院 休書院

大原 慈眼大師より此書取致る云々
納了

一 松平和泉より本方御養不相付先月廿五日迄
申上り申上り 言聞仍松平宮内少輔下者
上使申上り使後より云々云々為番曲白銀取致る
一 松平宮内少輔下者為積香鑑林より傳
云々云々後より云々云々
云々云々後より云々云々
云々云々後より云々云々
云々云々後より云々云々

江島尾人より此書取致る云々

二 云々云々
云々云々後より云々云々
云々云々後より云々云々
云々云々後より云々云々
云々云々後より云々云々

二月三日

一 巳日より此後より具以渡示一夜並にわきま伊豆
間より此書取致る云々云々為番曲白銀取致る
一 於此度間書後より日光寺取致る云々
是後より此書取致る云々云々為番曲白銀取致る

二月四日

一 代振君家御出度り此の儀より

二月六日

一 掌中事

口同方名所奇跡ありて一人ありて所あり

二月六日

一 宮中行事

御所より來りて是より一書あり

二月七日

一 宮中行事

是より來りて是より一書あり
又御所より來りて是より一書あり
又御所より來りて是より一書あり
又御所より來りて是より一書あり

二月八日

一 御所書院 崇恩寺に在りて 仰所より來りて

坊上より 御所より來りて

一 御所より來りて 御所より來りて

同々奉往月沙江此、是後、高木三人之尻也
江中上

一 日光山門前、為年改、以清利、白銀、良、是、膝

大之、偶、有、事、上、使、言、之、且、是、日、終

獲、之、中、有、電、云、此、山、雲、口、以、此、地

之、系、太、儀、思、言、是、又、江、江、

江、之、相、凡、之、所、要、事、必、也、之、以、之、之、之、之、

之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、

之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、

江、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、

伊、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、

令、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、

多、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、

二月九日 他、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、

一 掌、中、無、事、令、一、枚、

口、一、枚、

伊、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、

江、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、

二月十日

一 御書後より日之しり正政於座居

所目之暮草兼録之

此何處より生徳り

二月十一日

一 酒井源次より日之しり正政於座居所目之

日夜あし麻巻一乃及眼一足張二袖細一乃及

二月十二日

一 源次より所目之退後正政名巻口中名重書

大久保丹波守 上使言事
紀
村向七郎 能勢越中 ち原 前代 向角

二月十三日

一 小川内儀 京政 於法座番 所見
一 久世大和守 禁中 山内 重清 用 序 今 月 末

康政 山内 重清 度 休 旅 光 市 後

二月十三日

一 康政 山内 重清

紀
山内 重清 山内 重清 山内 重清

二月十七日

已刻清長清三長之門名曰清江系清江系
如清江系之門名曰清江系清江系
及人之清江系之門名曰清江系清江系
門名曰清江系之門名曰清江系清江系

門神系之門名曰清江系清江系
清江系之門名曰清江系清江系
乃之門神系之門名曰清江系清江系
勤之門神系之門名曰清江系清江系
清江系之門名曰清江系清江系
之門神系之門名曰清江系清江系
山本平九郎 門神系之門名曰清江系清江系
由三平九郎 門神系之門名曰清江系清江系

一 卜 故 書 冊生月下 甲 有 番 大徳寺八

仰 月 とち光市 幸 後

二 九 とち光

仰 月 とち光 幸 後 仰 月 とち光 幸 後 仰 月 とち光 幸 後

二月十八日

一 以 日 大 元 僧 之 仰 月 幸 後

新 屋 住 之 仰 月 幸 後

仰 月 とち光 幸 後

仰 月 とち光 幸 後

仰 月 とち光 幸 後

二月十九日

一 仰 月 書 院 出 仰 月 幸 後

但豊松手飛おち於元松手飛り、飛ん
乳飛おち病悩中傳ふより

次、玉田市の 所國人

一、四勝、^{金取}上、^{金取}八、^{金取}井

氣之助 ^{金取}中、^{金取}吉三郎、^{金取}小濱、^{金取}孫次、^{金取}結、^{金取}國、^{金取}三

次、^{金取}友、^{金取}繼、^{金取}島、^{金取}所、^{金取}國人、^{金取}早、^{金取}大、^{金取}廣、^{金取}島、^{金取}三、^{金取}岸

雲、^{金取}少、^{金取}何、^{金取}口、^{金取}屋、^{金取}下、^{金取}如、^{金取}二、^{金取}元、^{金取}山、^{金取}成、^{金取}末、^{金取}村、^{金取}澤

此、^{金取}甲、^{金取}列、^{金取}子、^{金取}三、^{金取}郎、^{金取}所、^{金取}民、^{金取}房、^{金取}大、^{金取}松、^{金取}手、^{金取}飛

此、^{金取}山、^{金取}成、^{金取}末、^{金取}村、^{金取}澤、^{金取}山、^{金取}成、^{金取}末、^{金取}村、^{金取}澤

二月廿日

一、敏中、^{金取}山、^{金取}成、^{金取}末、^{金取}村、^{金取}澤

此、^{金取}山、^{金取}成、^{金取}末、^{金取}村、^{金取}澤、^{金取}山、^{金取}成、^{金取}末、^{金取}村、^{金取}澤

二月廿一日

亥事

記
乃三上より所
也彼所主簿より所
所所所所所所所

二月廿二日

亥事

二月廿二日

一
御
子
院
寺

日之夕也

湯治瑞福

石年之廣同

一、市立圖書館入會

性經

戸田佐清

會

大星山人俱哉
星全 仙舟
仙舟名義云々

紫竹

松平日守

水舌丸

桂井古齋
之爲一學
山南江之

小倉十之清
五國友在門
山口友在門

仁如保孫歸
東田名爲
杉井左系

小史紙中

蕭子云 弘明長壽 王法之

石壁之書

安慶伊賀子

中根宮石庵 永見新筆 小栗平郎

金藏大信 甲斐石門 八木石門

北山石門

新川石門

荒川石門 多石石門 三枝石門

中川石門 松平石門 戸田石門

伊東石門 初原石門

津井石門

新田石門 木倉石門 佐藤石門

井田石門 奥津石門

松平石門

村田石門 大井石門 坂井石門

久田石門 松平石門

仙石石門

石田石門 坂田石門 石田石門

山田石門 木倉石門 石田石門

松平石門

川田宗茂

伊東八景

渡邊九助

石田宗茂

石田宗茂

甲斐宗茂

松平源助

小栗宗茂

奥平宗茂

伊東宗茂

渡邊丹次郎

中山宗茂

松平宗茂

久保宗茂

姓宗茂

久保宗茂

伊東宗茂

市書院

石田宗茂

石田宗茂

石田宗茂

石田宗茂

石田宗茂

石田宗茂

山口宗茂

石田宗茂

石田宗茂

石田宗茂

石田宗茂

石田宗茂

長谷川信房 佛永源寺門 新石寺門
福永源寺門

戸田信房 戸田信房 井戸寺門
信房寺門 八幡寺門 日蓮寺門
多賀寺門 一又仁寺門
三枝寺門

中川寺門 伊豆寺門 服部寺門
渡邊寺門 多賀寺門 松平寺門

長谷川信房

中根寺門

林信房 寺門 角井信房

荒川寺門

佐藤信房 寺門 井戸寺門

寺門 寺門 寺門

寺門

寺門

前田左衛門村敷左衛門 松平松母
 小糸新左衛門 松浦市左衛門 小姓源左衛門
 山本十助 同左衛門 下村 左衛門
 伊達軍人 山田
 吉田 左衛門 松平左衛門 喜木 左衛門
 川原 左衛門
 市通 左衛門 後 松平 左衛門 松平 左衛門

二月廿四日

一 時 津波 日 見 上 役 書 後 後 書 但 口 前 之 日 存 在 云
 傳 言 即 為 此 種 此 種 也
 傳 言 即 為 此 種 此 種 也
 二月廿五日
 一 於 所 處 間 國 井 津 波 日 見 之 故 湯 暮 暮 之 朝 形 亦 唐 給 君 長 國 敵
 一 四 月 廿 七 日 之 故 湯 暮 暮 之 朝 形 亦 唐 給 君 長 國 敵
 一 於 所 處 間 國 井 津 波 日 見 之 故 湯 暮 暮 之 朝 形 亦 唐 給 君 長 國 敵

二月廿五日

美中 公 氏 手 本

一虎藏

一
今夜入夢
西堂
夢
名

志中第後

此
女
兒
化
身
漸
臨
歸
也
其
子
女
亦
在
中

松平筑外守左衛門尉
 四十一代宗子

二八

一
左馬江級右馬江級
前清座乃
清對款

一諸大名御覽之

一
昆山人物誌
上使

内藤山雲の書きし書十七日所迄 文書尾

能書漸進演し

一 松平藩前より壬子二日卒乞ふ此時分途

上岡信く今より此言

此何處より生ぬらん

二月廿九日

一 松平上信より松平の書 上達し世に知らる

此書東より来る

此何處より生ぬらん

松平氏より来る書 上達し世に知らる

此書東より来る

癸卯之春

三月廿四日

一
已
知
素
常
知
常
知
國
有

一 知恩院代儒少礼しやうらい少礼しやうらい遠國えんこく寺てら礼らい

章書院

原方收其同念

程氏書卷之

系極品

松平封馬

乃暇
時所
之
所

安度蒂力

口勝

金古近州所と我所一

二条御所

口勝より書

桂村希力

松平母後

西郷

同病者

同病者

一 二条 海部 平利 之 部

此中より多くは海部氏と云ふ所なり

三月二日

一 条

久世氏より書 五段より海部氏より書

二月廿

一 上巳 卯年 長序

一 同日 夜市 卯年 長序

一 同日 夜市 卯年 長序

一 同日 夜市 卯年 長序

同日 夜市 卯年 長序

二月廿

同日 夜市 卯年 長序

二月廿 卯年 長序

二月廿

卯年 長序

歩綱も面々口綱より安成港に停泊す
古より港あり
 平兵衛一元等

二月七日

一 下町二九 渡部末之助 澤

方飛王なる者あり少頃、
 不夜天利、只今小山名、重、
 以て一、

二月八日

一 平兵衛

此方より、
 此方より、
 此方より、

子守り

松平

子守り

松平

松平の御子守り

二月九日

子守り

松平

子守り

松平

子守り

松平

二月十日

子守り

松平

子守り

子守り

二月廿二日

宣長事

此
書
中
の
事
物
七
紙

此
書
中
の
事
物
七
紙

二月廿二日

一
平
上
野
元
海
津
島
上
野
中
野

宣長事

此
書
中
の
事
物
七
紙

二月廿四日

宣長事

おき物屋より走一馬
御手紙見せしなり

一紙
おき人系動かし系

おき物屋より走一馬

おき物屋より走一馬

○元利信路より走一馬

おき物屋より走一馬

二月十五日

一 おき物屋より走一馬

おき物屋より走一馬

おき物屋より走一馬

おき物屋より走一馬

おき物屋より走一馬

おき物屋より走一馬

おき物屋より走一馬

おき物屋より走一馬

おき物屋より走一馬

おき物屋より走一馬

おき物屋より走一馬

小池坊

おき物屋より走一馬

一 おき物屋より走一馬

おき物屋より走一馬

おき物屋より走一馬

おき物屋より走一馬

おき物屋より走一馬

おき物屋より走一馬

おき物屋より走一馬

おき物屋より走一馬

おき物屋より走一馬

おき物屋より走一馬

おき物屋より走一馬

おき物屋より走一馬

おき物屋より走一馬

おき物屋より走一馬

おき物屋より走一馬

おき物屋より走一馬

おき物屋より走一馬

金之役
金之役

結目

福垣友之助

脇坂右馬

福垣教馬

柳永誠中

但城中より方へ移るは人より移るなり

日

日

己卯書院 常任在る者多し其方及皇親戚 所見より白書院 出所より前
早々七右衛門坊下よりとありん 早々書院より 早々丹波より 早々丹波より 早々丹波より
早々丹波より 早々丹波より 早々丹波より 早々丹波より 早々丹波より 早々丹波より 早々丹波より 早々丹波より 早々丹波より 早々丹波より

心之如也
心之如也

心之如也

心之如也

心之如也

二月十六日

一年上り元 沖成未市川 主事

心之如也

心之如也

二月十七日

一 紅葉山 市街より北へ遷るに古蹟あり

二月十八日

分

新原執事

[illegible]

女房の御用

松平公方之屬以鶴之

二月十九日

一、^{已刊} 墨書院
部

佳月

金瓶梅
繡像

金鼓

水之為物
無所不至

世之為子者

五

傷寒論

与力同心
 兄弟

松平文庫

石門先生

松平助

福壽右丞亮

行願如流

如多可也

柳永词中意

右平上落子返り入御

松年如系心子勝地
密雲代令政服
臨生印德榮

大觀院 卽佛堂口 抱玄子

二月廿日

東廠
御史
任科
題

紀伊郡下高田町にて
新島嘉平の墓ありと傳ふ

上乃如小信手然張之如故
一乃之如之

二月廿一日

一乃中ノ如之

二月廿一日

殿中ノ如之

二月廿二日

一 已后列尾 減島 上張末下刊

之部

初親 親 而此何故

二月廿二日

一 今晚新二月大深三降中より少大町敷

十二所家敷更後一軒焼失年別積

一化 他人の物と親中

化 伊原内

多動

水戸内

多動

水戸内

多動

水戸内

山本内

久保内

山本内

久保内

山本内

久保内

元老長門内

多動

元老長門内

多動

元老長門内

多動

元老長門内

多動

元老長門内

多動

丹波大寺内

多助 持明院下

持明院下

多助

池田島内

多助

池田島内

持明院下

多助 池田島内

伊豆島内

多助 池田島内

持明院下

多助 池田島内

持明院下

多助 池田島内

二月廿二日

一 正法寺島内

一 正法寺島内

一 正法寺島内

多助

池田島内

二月廿六日

一 正法寺島内

多助

池田島内

小出島内

加友島内

山田島内

池田島内

池田島内

尾花山元伊東

神元 水元

湯沼元 水元

日之端 湯沼

勝

大沼氏部

伊東氏部

酒井氏部

大沼氏部

神保氏部

伊東氏部

伊東氏部

伊東氏部

伊東氏部

伊東氏部

伊東氏部

二月廿七日

一 伊東氏部

二月廿八日

一 諸君に御月平々

乳

糸部乳

尾 徳の宛へと書

松平信清

加茂社人

天守寺社

は清父の宛へと書

信清の宛へと書

糸部乳

尾 徳の宛へと書

織田家

堀大子

冬 糸部乳の宛へと書

一 大浦の宛へと書

上 糸部乳の宛へと書

一 口部の宛へと書

右 上 糸部乳の宛へと書

化 糸部乳の宛へと書

二月廿九日

一 意匠事

二月晦日

一 左馬込右馬込の梅を新七と名を
一 経年致水戸致尾花致の梅を新七と名を

今日 皇宮内閣の御用を御用と申すは中々 後教より之を法に

此伊勢より 江戸より御用を御用と申すは中々 後教より之を法に

二月廿
今日
利分
丹利
公

定

吾利交丹室門にても思ふ能く沖刺す
 吾友と云ふは、
 何れも自然ふ處なること一也
 以前、休天とて、
 吾人、後世に於て、
 吾人、同古に於て、
 自今、吾人、

伴天竺人限之石

一、爲人の爲に
心を尽す

日名 蘇門族 阿人 恨五 孫教 又八 王孫 校 品 方

あゝ世の塵芥とてあゝ一若かり並代なりけり

上其小者人得之
 多以曲事之
 依
 你不知也

乙丑年二月

古溪人又ハ
古溪人

突、活れし薬を

一 本 卷 利 文 丹 所 創 札 心 起 而 居 札 之

公叔所為孔之領學教者之也

而急之年二月

書長門

兼應之甲午年

二月朔日

一 佛乳例通

一 升伊掃初日

上使以御方元心齋ノ新工

大工保母方

一 多りく保料肥後方

上使以清田年終方

一 多りく 年

一 松平肥前方

上使以如元甲斐方心齋ノ新

七 多りく

第百
 此處方上在口部後之凡此上下之口部
 凡
 此處方上在口部後之凡此上下之口部
 凡
 此處方上在口部後之凡此上下之口部

十二月二日

已
 二九 御成未下 列 置市

此處方上在口部後之凡此上下之口部
 凡
 此處方上在口部後之凡此上下之口部
 凡
 此處方上在口部後之凡此上下之口部

此處方上在口部後之凡此上下之口部
 凡
 此處方上在口部後之凡此上下之口部
 凡
 此處方上在口部後之凡此上下之口部

十二月二日

一 依竹原院受系勤分
 一 依竹原院受系勤分
 一 依竹原院受系勤分

系勤分凡

南約山歌

後野園摘

松平御後

津路云作

永松花子

岩城但馬

九鬼武助

是者倫子

古方河内

六人伊賀

東山修理

岡式部

立見氏助

池田右京

加藤伊藏

菅大孝

伊东玄右衛門

一柳亭書局

小出与平次

金東光村

海内月記

木下德盛卿

右人主以進物礼次

一松平隆興寺以任名以橋下河等二種新之

乞放仙臺 権現柳御子建之首尾能

遷 至名有子

二九 ^{午上刻} 渡御 青蓮寺

既得風月令 以名 諸國平次方

今月小月 加者 幸月 所留少中 馬也者少中

虎記
二虎
御成

尾
初
乳

己月己日

陳仲英刻

張乃為
乃乃乃
乃乃乃
乃乃乃
乃乃乃

佛乃記
佛乃記

五ノ三

一
全
五
大

有
意大是

李時珍

何

二

1

1

此
 乃
 一
 也

沈復

三

海內同病

初平何處

九

夏旦方

伊東

辛氏

玄大子

一柳

五

今更刊

りて之を以て

七

二
天
海
石
山

學古知今

三子
常山傾現

費及
市價

10
三
七
小
七
三
七

十二月

之小雀
一大小保三十斤小雀肉光如小雀肉也
修竹老竹皮

御目見

御目見

但此後三日之内

二九

御目見

還所

松平

上段町中 御目見 御目見 御目見

己月七日

一 忠書院

出所紀 御目見 御目見 御目見

御目見 今發 松平 御目見 御目見 御目見

御目見 御目見 御目見 御目見 御目見

御目見

御目見

御目見

但此後三日之内

御目見 御目見 御目見 御目見 御目見

己月八日

一 正列 御成^{口務言口}馬定 上院

一 松平隆興^口系^口府^口 上使^口後^口方

比 今川利^口水^口之^口御^口中^口之^口 御^口中^口之^口方

御^口中^口之^口方^口中^口之^口方^口中^口之^口方

己月九日

一 馬書院 出御

系^口勤^口之^口方

一 張^口之^口方^口御^口之^口方

御^口中^口之^口方^口御^口之^口方

御^口中^口之^口方^口御^口之^口方

御^口中^口之^口方

松平隆興^口方

依^口行^口修^口理^口方

丹^口羽^口乃^口系^口方

織^口田^口乃^口系^口方

矢山知事

杉本吉太郎

佐山知事

平野権平

右人々 山崎系 彦山氏 進取系 彦山氏

口勝

小土誠一

右人々 彦山氏 彦山氏

宗恵

笑雲

右人々 彦山氏 彦山氏

己月十日

一 彦山氏系

彦山氏系 彦山氏系 彦山氏系

彦山氏系 彦山氏系 彦山氏系

山内中守左衛門時政の令一紙
 日付の字を、令に改め、
 紙相違を認む
 松平新五郎

十二月十一日

一 以 上便に相なり

松平新五郎
 上便に相なり

松平新五郎
 上便に相なり

松平新五郎
 上便に相なり

松平新五郎
 上便に相なり

松平新五郎
 上便に相なり

松平新五郎
 上便に相なり

松平新五郎
 上便に相なり

十二月十二日

一馬書院 出御

招年新太郎
招年お孫
招年お孫
招年お孫
招年お孫

五馬お孫

右人々お孫
上段お孫

お孫お孫お孫
お孫お孫お孫
お孫お孫お孫

お孫

お孫お孫お孫

お孫お孫お孫

お孫お孫お孫

お孫お孫お孫

お孫お孫お孫

招年お孫

招年お孫

招年お孫

招年お孫

何々々々

何々々々

何々々々

何々々々

何々々々

何々々々

何々々々

何々々々

何々々々

先利日向方

加茂出羽方

先利伊豫方

小出大和方

木下伊豫方

馬内伊豫方

上原伊豫方

上原伊豫方

上原伊豫方

奥日
松平部大目付
松平大目付

松平部大目付
松平大目付

松平部大目付
松平大目付

松平部大目付
松平大目付

松平部大目付
松平大目付

己月十二日

一馬書院 出所

松平大目付

宗封島方

東内記

相平寺所方表式

封島方

立見所通所表

右方人所以 上便所是又白浪所股所よりわんし

沖島より 但人々より宗封島方より伝へられし上馬より宗封島方より

布平 心所白浪所よりより宗封島方より

形方所よりより

稻系所よりより

二日 宗封島方よりより

りり

形方所よりより

りり

形方所よりより

形方所よりより

形方所よりより

形方所よりより

形方所よりより

伊东太初方

智島所よりより

秋月長門方

戸川太初方

木下清融方

相良を以て

建部内通

市橋下徳方

瑞芳十返中々

中々中々

久為修丹後方

吉本中々

一 抄年紙前々 系部方 上使伊豆方

一 古紙見半 不筆紙卷方 所目之古紙見半 縁之

一 小井古上目之將大膳縁之

一 板倉縁之 所目之古紙見半 縁之 信之

日 宗討集方 心筆之 松平公作方 右紙直方 信方

化 古紙修縁之 所目之古紙見半 縁之

瓦 古紙修縁之 所目之古紙見半 縁之

古紙修縁之 所目之古紙見半 縁之

化 古紙修縁之 所目之古紙見半 縁之

古紙修縁之 所目之古紙見半 縁之

己月十日

一 級中列系

化 古紙修縁之 所目之古紙見半 縁之

花山氏縁之 所目之古紙見半 縁之

花山氏縁之 所目之古紙見半 縁之

花山氏縁之 所目之古紙見半 縁之

花山氏縁之 所目之古紙見半 縁之

花山氏縁之 所目之古紙見半 縁之

花山氏縁之 所目之古紙見半 縁之

己月十日

一
か
御
石
向
方
今
日
御
目
入
等

尾
字
い
ふ
論
大
名
也
附
員
之
手

二月十二日

御園足耳亦日光

御養
作

升平掃部司力窺涉經電
御月見

今發水戶中務殿
後云有月室
以女中近江中務殿

之

何限為然

中
抄
卷

白浪石收
考物志

御覽

中納言

石之山

正月十七日

紅象山
御食以造象山
御系稿

日光
下
御衣式今川利初書

小龍

[illegible]

抄本
抄本

[illegible]

己月廿一日

一上院

御書

御書保樹肥後方

一今川初刻古樹秋之現中より光輝如くあり

御目見

比
より華に彩るる

己月廿一日

一藤原院
馬書院

出御

奉迎

御書保樹肥後方

御書保樹肥後方

御書保樹肥後方

御書保樹肥後方

御書保樹肥後方

松平紙前方

松平紙前方

日根紙前方

學傳文選

田上之介

續

傳海集

や
あ
し

初學古風者而長於此者

上段 河井親重の父の墓

小川陽成
戸田忠孝

我故常之
以爲
古人之
不知
今之
知

民以食爲天、上恆大匠多勤、仁授、以毫、初力、以氣、

夜半月明如畫
已月廿二日

二月廿二日

殷仲弘集

酒井雅之丞
松平鹿太守
羅武忠
右
高橋
常
主
務
所
用
之
人
御
座
上

九
子如柳溪初春
如柳溪初春

先
年
本
處
所
在
氣
分
之
海
自
有
之
如
海
對
於
東
風
氣
中
海

二月廿三日

己卯
馬書院

生部

Established

四上依り急所

御
方

品川内膳心

御刀欠

一日光赤日

御若代格系要儀子帰来

御目欠

白書院 出所

与傳養院 格系所進儀、心方目録抄系

心礼

次 院便小川坊敷大納言

新院便流水岩大納言右同

女院御所より御上給へ共令野々子抄系心礼

右所より御上給へ共令野々子抄系心礼

次 例部便小川坊敷家相出所

次 関白殿若代格系心方目録抄系

次 一條前所政より若代格系心方目録抄系

次 二條前所政より若代格系心方目録抄系

次 与南内侍上御所

右身より傳養院 院便例部便自心礼

次 院山院右大臣心礼

一 大廣間 出御之家 御封親次公家

御封顏公

卷之五

子所製

八
橋

东小堂

葵上十

祝文

叔

福沐仁壽

瓶
像

服之便

傳書

本日
 已上列大廣留
 新紀伊及水戸殿屋仕
 早々上居御膳通く
 以下口振方
 所因已公
 所因已公
 所因已公

九
要任丹地海角

身は成るゝなれど

正月廿一

敬仲之系

久八平記

己卯年八月

一 倒月 御月見

一 己卯年 出御

小松中納言

右内膳の爲に連

膳房

爲に之の爲に

松平城後

右内膳の爲に連

一 松平城後

御月見 右内膳の爲に連

右内膳の爲に連

膳房

膳房

膳房

膳房

膳房

膳房

膳房

膳房

膳房

膳房

膳房

膳房

今川の御少の御り 天幕の代官
是ハ南無年、但大の御り也

鈴木伊之儀

右の御り、今川の御り

一日光 御使上校、今川の御り、月曜 又、鈴木伊之儀

夫より後

右の御り、入所

夫より後

此の御り

十二月廿九日

一、御使上校

兼應三年

五月朔日

一 馬書院 出所為典之家に次水戸の殿

祝文に河原のしるしに際して演説す

一 白書院 出所は元月

海津

寶満院

新島

福正院

右に記す如く後任の礼部院に参事番被任

三好山内人

舍那院

醫王院

右御前氏口元

被立書目

被立書目

大床惣代

小堀仁右衛門

所立御前氏口元

被立書目

口元

所立御前氏口元

五月二日

二九 御成申上列置

五月三日

一馬書院 出御

徳目札

御方刀 國行

白根子枝

綿子右北

右雅帝氏被服をとりおし

松平右衛門

次馬内前正右衛門右近衛守山左衛門右近衛守

家智右衛門右近衛守

御方刀 宗右

白根子右枝

綿子右北

雖被服

系持山城守

松平家智右衛門

右近衛守

湯井右衛門

右近衛守

仙田右衛門

右近衛守以上右近衛守は是迄
右近衛守以上右近衛守は是迄
右近衛守以上右近衛守は是迄

御月見終りて後かゝ 御月見の延川及今日

丁

松平左衛門伝家

小川平右衛門

是田平右衛門

右 御月見

但各持て物見を古来に於て家傳に傳へて其の意を承け置

蛸觸岩松

在平右衛門

左 御月見

同右平右衛門

石川氏

松平氏

内右衛門

左 御月見

松平氏

石河氏

令以松

松平氏

石河氏

古河氏

不之九信

送物

松平氏

秋田氏

松平氏

松平氏

本國光

御月見

親世保女壽多子多子孫衆族如多

白浪竹塍木頂戴之

二九
卅一
卅二
卅三
卅四
卅五
卅六
卅七
卅八
卅九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

五月五日

一
說部紀略

御
因
見

四書院廊下

下
伏見
新七郎

本朝所自... 出所... 中...

五月六日

上松平内藏主光俊卿之府

御覽

心垢淨者德厚

你

郭田稿

子夜

内者高々也

少壯

小垵之志

子元易

南菊之通

輕舟左橋

不修也

列虎者王

香江同好

此乃臨江府之志也。其地最廣，其民最衆，其物最珍，其產最富。其地最廣，其民最衆，其物最珍，其產最富。

五月九日

一 ^{上列} 初九 御成事列 還御

今日 今般より進物おぼつかぬ事。御成事より多岐に渡り
礼 御成事見たり常々一様

五月十日

一 殿中御列衆

礼 御成事見たり常々一様

張子午海花
何くとも
何くとも

多末万々
二末五末何と何
親分

甲府五末何と何

令妻長門方

一柳隆光

崎津保馬方

内省九末光

堀磯村方

石川梅方

右数組氏

三枚惣氏

何者

肥後五末何と何

長門五末何と何

右五末何と何
二末五末何と何

井上末方

津田末方

加藤末方

池田末方

水野末方

大田末方

系枝丹海方
上便村平伊方

法部成方
上便村平伊方

上便村平伊方

張子午海花
何くとも

五月十六日

一 殿中女御系

五月十五日

一 諸公礼如例

参入し礼奏進物

一 馬書院 出御

若王子

勝仙院

何處使物見上

系勤心礼

皇族三名
尾花三右

之免大膳元

初 御月元 けつとをき

内者右近

尾花

備后内

右青

戸田但馬守

右 尾花三右 けつとをき

尾花

中 彼左衛門尉

尾花三右

町屋助左衛門

尾花三右

初 御月元

町屋三右

町屋三右

系勤心礼

尾花三右 けつとをき

五月十六日

初 御月元 けつとをき

御月元

一 二九 御成未刻 還所

一 松平伊豆守親史為 御身 上使松平忠康為

心算子一様多

書久に

五月十七日

一 已刻の如く御身親史同上御所にて頂戴

内 御身 御身

御叙 松平忠康為

御習 松平忠康為

一 阿部忠房為侍

御身より由二九 御成未刻 還所

本日 已刻の如く御身親史同上御所にて頂戴
松平忠康為侍
阿部忠房為侍
御身より由二九 御成未刻 還所

房已大

居己大
三
云乃太丈下所けり二
三
「云々」並に所けり二
三
「又」又谷乃太丈下所けり二
三
「大」大丈二所けり上

五月十八日

一
以
上
便
心
衆
爲
一
心
也

上經
卷之六

紀伊

口
古
但
子

水戸政

日
冬
大
初

虎張敬

古是直取之人只足為系

内省 上便 修心 乞心 门 禄

加便
心持之病
物中
為地
心常
巡

勢凡一

作

與之化同也

紀二五

紅尾虎

義松志を佐州録内と云ふ事あり

五月十九日

二九 御成り 御馬券 石之坂日走 山度

石之坂 二九 御成り 還御

より江同方

五月廿日

一 東叡山 御成り 御馬券 石之坂日走 山度

一 御成り 御馬券 石之坂日走 山度

御成り 御馬券 石之坂日走 山度

於保良寺上檀日走 八幡 五月廿日 御成り 御馬券 石之坂日走 山度

五月廿一日

一二九

渡御未り

還所々々居之四馬馬石

本日 出立之儀に付
於河内國上座麻呂村
飛上座金
尾伊ふまゝ入る可
此後本指極上
此等
石川方目一居死云

五月廿二日

一 心持方 飛上丹後
左之山崎
此後

持中の方御用々 御用

一 申上利御馬馬石

本日迄同方

尾方方行々々々々

五月廿三日

馬場院

御水戸御用取

御封紙

松平右衛門

御用取

御封紙

尾形泥濘

小室宗之助

柳原綱中

右ふ新の礼

松平綱中

小室宗之助

細川綱中

長尾綱中

右 御用取

礼

馬場

秋之季人子

子

吉田

丸門

万石

内

三枝

吉田

持

右馬代 玉璽之御子 又右衛門

右馬代 右木新入番 市島人

北保之番に寄 友之御

右初 御月見

幸三九 御成未より還御

一日下初化十部山本平九部為人の如く居る所あり

御成 三石之如切よりしを御成

より化同系

又月廿二日

内者出立より日光殿 御月見

今日 右池尻柳御遠忌御席より後膳より

四部札より案心御成より 御教より右膳より

御如
其化同多

五月廿六日

已上列
御成列 還沛

五月廿六日

紀伊守相殿水戸中納殿以
上役第...
申分列御如...
上役...
上役...
上役...

尼地 西より出づる多小舟の初之修設に當りて多小舟の
 花 小舟年々より多小舟の初之修設に當りて多小舟の
 小舟年々より多小舟の初之修設に當りて多小舟の
 小舟年々より多小舟の初之修設に當りて多小舟の

五月廿七日

已下刻瓦
御成廣中橋口堰之御倒瓦
尚數少人但荒川長勢乃但令因跡意口流
古因十九處乃但大率之脈但乃至而九處乃但

[illegible]

抄年史記

杉年冬月

小坡内記

右之人よりてうき中府の船子早也なり
一升伊掃の良徳科肥後より上使訪者た係を
心次第習ふなり

五

六

[illegible]

五月十八日

庚日 晚雷雨至，升殿旱，乃欲人吉辰。

七月流火

佛力弘弘
佛力弘弘

多餘以

權借

頤
學
院

右飛矢以應之

一 抄年相家乃三男并し幼突ふ云々
云々云々云々

作中
御覽

尾張中納言殿 初乳
上便 各五粒 勿令過

柔日
今日
道
元
に
あ
あ
あ

一、
此
人伊東。あまゝハ

五月廿九日

元 御成にお白紙候様 口宣書付候へり

置中

五月廿九日

詠史
如月

五月廿四日
 白書院
 出御
 口乳如常
 出御
 西貢口三郎
 即歸於丈上

尾り走馬、或る日、美作より、行方、但口、遠く、信濃、酒井、湯谷、より、来り、て、

六月二日

百五十九

御成末刻

還所

女
伊達公府より入書下りてくる由候事口付

六月三日

一五書院

出所

系勤心

錦官

日

所より

日

系勤心

牧野路河

如多紙

杉平

井上

系勤心

近村幸祐

近藤三三

織原方雄

赤松氏三子

本巻係七郎

小松中納言歸正丸任左衛門次郎

一 昆池川蓬門流 御月次方一初任 重教

敷山 方左衛門丸也

「勝」

後二子所

吉田永備方

後河

牧野瑞平

後台令十郎

皆川又七郎

注記由願

右為人下彼左為内以系者 御月次

小佐仁右衛門

右 松中乃御月次 御月次

湯井内記

右 湯原乃 御月次

右 坂立乃 大右衛門丸

八重吉良

田中三郎次

池田常子

為記

御書式金抄
信實丸

八
腰子
穿
丸
三

浪子

他日五言

右夷習御覽

有早之清之貨之

大坂車道署
支店 番元 系

子

右
御
圓
欠

申子

御馬

柔日
石子後置智一而組

的

俾所見物中似實

此
原不白一
一

水之山名に記使不^{御書}平信澄子
日乃以手冊為書使不^{御書}平信澄子
^{此二千石}

四月廿五日
九市子
山王長天郎
市北仁義

六月

[illegible]

評定所 或曰伊豆乃公成澤彼處主卷
城子

六月廿八

一 録中 字集

尾 尾子相傳子五馬中格を病むと云ふ口は使ふ 尾子

六月廿八日

尾子相傳子五馬中格を病むと云ふ口は使ふ 尾子

尾子相傳子五馬中格を病むと云ふ口は使ふ 尾子

尾子相傳子五馬中格を病むと云ふ口は使ふ 尾子

中多内記
中多内記

右の所御馬より

尾子相傳子五馬中格を病むと云ふ口は使ふ 尾子

尾子相傳子五馬中格を病むと云ふ口は使ふ 尾子

尾子相傳子五馬中格を病むと云ふ口は使ふ 尾子

尾子相傳子五馬中格を病むと云ふ口は使ふ 尾子

尾子相傳子五馬中格を病むと云ふ口は使ふ 尾子

尾子相傳子五馬中格を病むと云ふ口は使ふ 尾子

尾子相傳子五馬中格を病むと云ふ口は使ふ 尾子

尾子相傳子五馬中格を病むと云ふ口は使ふ 尾子

尾子相傳子五馬中格を病むと云ふ口は使ふ 尾子

尾子相傳子五馬中格を病むと云ふ口は使ふ 尾子

尾子相傳子五馬中格を病むと云ふ口は使ふ 尾子

尾子相傳子五馬中格を病むと云ふ口は使ふ 尾子

尾子相傳子五馬中格を病むと云ふ口は使ふ 尾子

尾子相傳子五馬中格を病むと云ふ口は使ふ 尾子

尾子相傳子五馬中格を病むと云ふ口は使ふ 尾子

尾子相傳子五馬中格を病むと云ふ口は使ふ 尾子

尾子相傳子五馬中格を病むと云ふ口は使ふ 尾子

尾三つ成 尾十成

尾四成 尾五成

尾六成 尾七成

一夜言 尾八成

尾九成 尾十成

尾十一成 尾十二成

尾十三成 尾十四成

右の如し

物老花湯子

物老肉脍

海口二十所

中多肉脍

系板右進

松平常口

山崎勲忠

系勲のし

尾十成 尾十一成

げうき

こた

尾十二成 尾十三成

右の如し

初 御月見

山崎勲忠

小坂長太郎

湯井勲忠

湯井紀伊

湯井利助

湯井徳也

信次年人正二書

伊根保太郎

丹後寺二書

渡邊半助

中根昌子二書

中根茂吉

月人三書

中根慎現

赤松寺二書

赤松寺三書

十右衛門二書

志山寺三書

美濃寺二書

久松金次

右向 御月大御親王御紀理二

尾張寺御所二書

石河寺御所二書

三書

中根寺 石河寺 上覽

上覽寺 中根寺 渡邊新助

上覽寺 御所

一 尾張寺御所 中根寺御所 神保寺御所 渡邊新助

御所

尾張寺御所

尾張寺御所

御家山修度出来事十七日 正遷 主事

馬をく口度る 御月見

一 昆沙門峯門海 上度古屋但る方多く日光遷主

芝山より

馬 御家山修度出来事十七日 正遷 主事

馬 御家山修度出来事十七日 正遷 主事

六月十一日

一 御家山修度出来事十七日 正遷 主事

馬 御家山修度出来事十七日 正遷 主事

六月十二日

一級中五門系

本日申刻日庭あり、隨日るを所射留
方見伊豆とるはる行きてる年

六月十二日

一級中五門系

本日申刻日庭あり、隨日るを所射留
方見伊豆とるはる行きてる年

尾尾伊豆とるはる行きてる年

六月十八日

一 阪中七列系

此等千細之
凡此等三處之風光亦多利て氣味所傳ふる趣意亦所傳ふ也

六月十九日

巴下別
一 馬場流 出御紀伊版水戸版紀伊家相版

多戸中版 所自又今發

東照寺正遷 主水保山口版版等之次流法

嫡子永川礼
同信三井伊家等以保料所傳ふる趣意亦所傳ふ也
次井伊家等以保料所傳ふる趣意亦所傳ふ也

系動礼

光緒元年

後院内匠

錦花
川合東入合氏

水谷伊勢守

氏像言

新名城前守

右以進物り

初 御月久

能也

本多 一孝 春日通年

所て

能也

本多 友玄

二

能也

尾崎 道海

三

日人

右以進物り

同 源 右 衛 門

右以進物り

能也

瑞 傳 甲 斐 守

二

瑞 傳 加 賀 守

右以進物り

能也

小 倉 康 之 助

三

三 宅 大 膳 元

右以進物り

長門子官

洲門丸名

肉通

七夜

右卯 洲門丸

一 道春子子伯元印

三日月

三定

右卯

一 左卯 法大在 一 日先正 子相

馬後

右卯 平入

一 綿心帳子 一 琉球布帳子 一 白糸二 子相

伊豆子

一 甲子 洲門丸

月廿日

一
上股
御
御
保
肥
保
保

御園見

口曉作

一元 復御 車列還和

經傳及下
五印音上元

六月廿一日

殷中記

五九

二虎佐竹助乃存之欣

作序

日之奉勢役山印寧於陽系

[illegible]

低者良爲之
博者下之爲
一

子夏之志主仁也

城

六月廿二日

一 別
二 九
御成未刻 還所

六月廿三日

一 湯井渡後方 役日光御系知石就問

御月尺 林橋一宮 房之 小宮系 左後方 同所 有

御月尺

一 新嘉坡 役日光御系知石 作役 時 膳 小 宮 系 左 後 方 同 所 有

六月廿二日

一 ^{已別} 元 御成平別 園所

一 坊上寺 御佛殿 心所後方 御表式所

是日 門前 御成平 上夜 上夜より 往來ありし

六月廿二日

一 ^{已別} 白書院 出御 口長寺

分發 東照宮正遷 宮内日光山為

奉幣 侵山本宰相 白佛 御目見 在り

御目見 進上 御目見 手近 御目見 長寺

御目見 長寺 御目見 長寺 御目見 長寺

新書 御目久次掃部左記後方

御目久次温室日記後方掃部左記後方 入所

此書は御目久次温室日記後方掃部左記後方と云ふ事なり其の書は御目久次温室日記後方掃部左記後方と云ふ事なり其の書は御目久次温室日記後方掃部左記後方と云ふ事なり

六月廿六日

何書院 出所 此書は御目久次温室日記後方掃部左記後方と云ふ事なり

寺部使山中宰相記 初巻 此書は御目久次温室日記後方掃部左記後方と云ふ事なり

此書は御目久次温室日記後方掃部左記後方と云ふ事なり

此書は御目久次温室日記後方掃部左記後方と云ふ事なり

此書は御目久次温室日記後方掃部左記後方と云ふ事なり

此書は御目久次温室日記後方掃部左記後方と云ふ事なり

御成金下
還御

六月廿八日

例月

日
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十

己亥
白雲流

出御（口書）日光山温泉門寺門跡

今夜如光山

東恩系御書後正延

五
山
法
車
水
脉

四說

東日之角五種以
李松院

淨教坊

御覽

易曰：「君子居則觀其象而玩其辭，動則觀其象而玩其辭。」此言君子居則觀其象而玩其辭，動則觀其象而玩其辭。此言君子居則觀其象而玩其辭，動則觀其象而玩其辭。

四角く金に在る

三度、出所上候と云ふ事、此二度、河内より板鼻に勝り、結同の事、大に條の河内を
大に、此二度、河内より板鼻に勝り、結同の事、大に條の河内を
小、此二度、河内より板鼻に勝り、結同の事、大に條の河内を
月、此二度、河内より板鼻に勝り、結同の事、大に條の河内を
カセ、此二度、河内より板鼻に勝り、結同の事、大に條の河内を
四、此二度、河内より板鼻に勝り、結同の事、大に條の河内を
入所、此二度、河内より板鼻に勝り、結同の事、大に條の河内を

